

〔萬葉集相四〕湯原王歌

月讀之光二來益足疾乃山乎隔而不遠國

〔萬葉集六〕大伴坂上郎女月歌三首

山葉左佐良榎壯子天原門度光見良久之好藻

右一首歌或云月別名曰佐散良衣壯士也緣此辭作此歌

湯原王月歌二首

天爾座月讀壯子幣者將爲今夜乃長者五百夜繼許增

〔萬葉集七〕寄月

三空往月讀壯士夕不去目庭雖見因緣毛無

〔萬葉集十〕雜歌七夕

夕星毛往來天道及何時鹿仰而將待月人壯

右柿本朝臣人麻呂歌集出

詠月

天海月船浮桂梶懸而傍所見月人壯子

〔大鏡花〕つぎのみかど花山院天皇と申き中ふちつぼのうへの御つぼねの小どよりい

せ給ひけるに有明の月のいみじうあかりければ見證にこそありけれ中さやけきかげを

まばゆくおぼしめしつる程に月のかほにむら雲のかりてすこしくらかりゆきければわが

出家は成就するなりけりとおほせられてあゆみいさせ給ふ程に下

〔源氏物語明石〕みあげ給へれば人もなくて月のかほのみきらくとして夢の心ちもせず御け

はひとまれる心ちして空の雲哀にたなびけり